

新しい発見

上越教育大学附属小学校

教諭 小山 明希恵

(平成 21 年度修了生)

今年、担任している 4 年 1 組の子どもたちと実践外国語科（外国語活動）に取り組んでいる。子どもたちと活動する中で、新鮮な驚きをもたらした活動を紹介しようと思う。

実践外国語科では、英語に慣れ親しむことと、子どもたちが世界を身近に感じたり、世界への関心を高めたりできるような活動を大切にしたいと考え、日々実践している。そうした活動の中で、ドイツからの留学生リンさんと一緒にドイツ料理を作る機会を得た。簡単にできてリンさんも大好きという「Kaiserschmarrn」を一緒に作るようになった。

この活動を構想した時は、リンさんと一緒に調理することで外国の方と実際にかかわる機会がもて、ドイツの文化や日本との違いに注目することができるといった異文化理解的な側面を意図していたのだが、思わぬ広がりを見せることになった。と言うのも、リンさんから「Kaiserschmarrn」のドイツ語のレシピが届いたことが始まりである。それは、参考までにリンさんが送ってくれたものだったのだが、何か活動に使いそうと感じ、子どもとの活動に挑戦してみることにした。

リンさんが来る前日、リンさんから届いたドイツ語のレシピを解読してどんな料理か予想する活動を行った。子どもたちはドイツ語が書かれた紙を見つめて、「さっぱり分からないよ～」という感じだった。ところが、材料欄の単位に注目した子の気づきから、雰囲気は変わっていった。

「 350 mL Milch 」と書かれた部分を見て、

「mL だから液体で、Milch ってもしかしてミルク。牛乳じゃない??」

「そうだ!」

子どもたちは、突破口を見出したようで、自分なりのヒントを見つけてどんどん予想を立てていった。

「Butter は英語のバターと一緒にだと思う」「塩って確かソルトだよ。じゃあ Salz は塩か?」「単

位がないのは個で数えられるもの」「Ei ってもしかして egg?」「卵と牛乳、バターと来たら小麦粉も使いそう」・・・と、どんどん自分の知っている英語の知識や料理の経験等を総動員してドイツ語という未知の外国語を解読していった。

翌日、リンさんと調理するとき材料を一つ一つ教えてもらった。ほぼ正しく予想出来ていたことを子どもたちは喜んだ。

これまで、外国語は未知のもので、まずは教師が必要なことを教え込まなければ子どもだけでは太刀打ちできないと思っていた。ところが本時、子どもは音やつづり、単位や写真、これまでの経験と言った様々な要素から推測してドイツ語のレシピを読み解こうとしていた。私の予想を超えた子どもの姿に驚きながら、杉田玄白や前野良沢が解体新書を翻訳した時ってこんな感じだったのかなと思った。

この活動を経て、子どもにとっての英語の捉えが少し変わったのではないかと考えている。それまではいわゆる「外国語」「自分の外のもの」という捉えしかなかったのが、「自分が利用できる知識」「自分の内のもの」「味方」というような捉えが生まれたように思う。その後、タガログ語でも似たような活動をすることがあったのだが、「英語で説明したものもあるよ」という私の言葉に、「わーい」と言う声が挙がっていたのが印象的である。

そうした子どもの姿から、自分が外国語活動に対してもっていた思いは、勝手な固定観念だったのではないかと感じている。もっと多様な活動、アプローチが可能なのかもしれない。ちょっとした遊び心やチャレンジ精神を大切にしながら、これからも子どもとともに活動をつくっていききたい。

※ちなみに「Kaiserschmarrn」とは、レーズン入りのパンケーキを細かく引きちぎったようなお菓子です。

Zutaten für 2 Portionen:	
4	Ei(er)
1 Prise(n)	Salz
350 ml	Milch
20 g	Vanillezucker
20 g	Zucker
130 g	Mehl Type 405
2 EL	Butter oder 3 EL
100 g	Rumrosinen oder in Apfelsaft eingelegte Rosinen

ありがとう

大学院 1 年 言語系コース(英語)

高橋紳太郎

僕は小学校の先生になるために学部時代は勉強をしてきました。各教科の教材研究や授業づくりはもちろんのこと、テーマを与えられた中で子どもを対象にした劇を創って発表をする劇コンテスト、合唱を完成させ子どもたちと一緒に参加する表現集会、町探検やスケート教室など授業だけではなく小学校の現場にもたくさん授業の中で参加させて頂きました。僕は岩手出身なので被災地の大槌小学校へ毎週学習支援に行っていたこともありました。また、心理コースに在籍していたので子どもたちの心の問題やいじめ、不登校のことについても学びました。「これで大丈夫。知識はあるから対応できるはず。」そう思っていたのですが、1つ問題がありました。それが小学校の外国語活動です。僕の大学には小学校の外国語活動についての授業がなく、それについては全くの無知でした。実際の現場に出て、外国語活動について右も左もわからない状態で教える自信はなかったので、教員採用試験を受ける前から「大学院で小学校外国語活動について勉強しよう」と思い、この上越教育大学の北條ゼミに入りました。

英語コースの先輩方は英語のスペシャリストであり、4月にあった修士論文の構想発表会を聞きに行ったときは日本語なのに英語を聞いているような気持ちになって悲しくなりました。さらに同じだと思っていた M1 の仲間たちも英語のスペシャリストへの階段を着々と登っています。

「僕も負けれない」僕は小さい頃からずっとスポーツをやってきた人間なのでこの言葉は僕の原動力になります。この原動力は僕をあらゆる面へと食欲にさせます。小学校の外国語活動の勉強のみならず、「SLA の理論について知りたい!」「生成文法勉強したい!」「現職の先輩から現場のことをたくさん知りたい!」「論文いっぱい読むぞ!」「英検 1 級取ってやる!」ここに入学する前は外国語活動の方法や授業を学ばばいいかな、という安易な考えをもっていたのですがそんなのはもったいない。外国語活動が教科化になる今、楽しむだけの授業でいいのか。活動主義に陥る授業が子どもたちのためになるのか。先輩からの言葉を引用すると「なぜ子どもたちにこの活動をやらせるのかをちゃんと説明できること」はすごく大切なことです。理論や実践成果等の引き出しをたくさん蓄え、いわゆる英語のスペシャリストになりたいと強く思うようになりました。

僕は今日も階段を上るために大学に来ています。もちろん、たまの気分転換も欠かせません。英語コースの先輩方は優しく知識が豊富です。M1 の仲間たちは同じ志をもっています。これ以上設備の整っている環境はあるでしょうか?この環境は歴代の英語コースの先輩方が創りあげてくださった賜物だと思います。この刺激的な環境に感謝しながらこれからも勉学に励みます。

大学院生活について

大学院 1 年 言語系コース(英語)

水澤由紀彦

上越英語教育学会会員のみなさんこんにちは。初めまして、英語コース英語教育専攻、1年の水澤由紀彦です。上越教育大学大学院に入学して早いもので3ヶ月が過ぎようとし、前期も終わりに近づいています。入学前は大学院の授業について行けるか、生活のリズムはちゃんと作れるか等、様々な不安がありましたが、現在では授業にも徐々に慣れて行き、毎日の生活リズムも安定してきました。しかしながら、入学して間もない頃は時間の流れも学部と異なり、授業の流れも上手く掴めず、体調も安定しなくて風邪をひいた時もありました。その時は、移住して来たばかりだったので、どこに何があるのか分からず、少々大変な思いをしました。それでも、1ヶ月も経過すれば「住めば都」、今は上越ライフを毎日エンジョイしています。特に、自転車に乗って地図も目的も持たず、時間の許すままにサイクリングをすることが最近の楽しみです。上越市はとても広く、少々移動は大変ですが、自転車で移動すると心地よい風を感じられ、とても気持ち良いです。そして、心身のリフレッシュと同時に本業の学問も大切にしています。

私は学部時代は社会言語学を専攻し、英語ではコミュニケーションがどのように展開されるかをポライトネス理論の観点から研究していました。その過程で指導教官から教職を勧められ、2年前に教職の勉強を始めました。なので、通常4年かけて取得するところを2年で取得したので非常に中身が濃く勉強になりました。しかし、その中で知識ばかりが先行してしまい、教育実習で自分の力量の無さを実感しました。1年前は本当に自分は教職に向いているのか何度も悩み、このままでは教壇に立てないと思い大学院に進学することを決めました。そして、昨年からは英語教育の学習を始めて現在では自分の専攻にまでなりました。英語教育の中でも私自身が元々本を読むことが好きだったのでリーディングを中心としながらも、実習に行き教室で学習することは級友と知識を共有することで学習者の学びを深める過程であるということが分かり、リーディングと学習者同士の学びが言語習得にどのような影響を与えるかを研究したいと考えています。そのためには、普段の授業で基礎知識を定着させ、更には論文を読んで学びを深めることが重要だと考えました。しかしながら、実際に実行するのはとても難しいです。学部時代は本を読むことが中心でしたが、大学院では論文を読むこと、つまり、実際の研究データを自ら読んで理解することが必要です。そこで、重要となるのが、統計学です。ですが、この統計が難しく、数学が中高を通して苦手科目だった僕は理解が大変です。学部時代に統計学の授業をちゃんと聴講していなかったことを少し後悔しました。ですが、少しずつ論文を読むことで、構成も分かり始め、参考書で確認しながら分析の種類もだんだんと理解できそうな気配が見え始めてきました。やはり、何事も焦ってはならず、自分のできることを積み重ねてできることを増やして行くことが重要だと思いました。「急がば回れ」この言葉を大切にしながら勉強を進めたいです。

また、同じ院生と過ごす毎日でも大切にしたいと思います。慣れてきたとは言え、まだまだ分からないことだらけです。このような時は、つい1人で抱えてしまいがちですが、同級生や頼りになる先輩方、経験豊富な英語コースの先生方に相談することで、的確なアドバイスを頂けます。

どんなに難しい問題でも、仲間と協力して支え合いながら乗り越えられるんだと感じました。こんな英語コースに入学できて私はとても恵まれています。この環境を大切にしながら、今後の大学院生活も充実させて過ごしたいです。

長いようで想像以上に短く、色々な経験をした前期がもう終わりに近づきつつあります。やっと、大学院に入学して安心していたらもう大学院生活の1/4が終了です。自分で考えていたよりも時の流れは早いです。来年には教員採用試験が控えています。まだまだ至らないところが非常に多く、時々自信を無くしかける時もありますが、今まで学んできたこと、これから学ぶことを自信にして来年の教員採用試験に臨みたいと思います。辛いと思いながらでは身につくものも身につけませんので、楽しみながら取り組むことを習慣にすることが今の私には必要です。来年の今頃、私はどんな生活を送っているのでしょうか。今からでも想像するのが楽しみです。

今後大変な日々もあると思いますが、少しでも将来の糧になるように勉学に励みたいと思います。

大学院での目標

大学院1年 言語系コース(英語)

田中研匠

大学院に入学して最初の学期も終盤を迎え、わからないこともまだまだある中、上越での生活には慣れてきました。しかし、住む場所が変わり、学ぶことが変わり、一緒に過ごす人が変わり、変化を求めるにせよ求めないにせよ私自身もこの新しい環境において変わっていく必要があると考えています。そこで、入学当初から現在にかけて感じていることとそれをもとに立てた目標について記述したいと思います。

大学院に入学してから私にとって新鮮だと感じられたことがいくつかある中でも印象的なことは、集団の中で役割が与えられていることです。私は英語コース内で院生協議会の代議員という役割が与えられ、院生協議会の中では厚生部の会計という役割が与えられています。大学生の時は責任を感じることはほとんどなく生活していたため、今は煩わしさを感じる反面、成長の糧になる良い経験ができると積極的に捉えています。教師として働き始めても当然役割が与えられ、責任ある行動が求められているため、大学院生活における自分の役割を全うし、反省した上でこの経験を今後の糧にしたいと考えています。

また、上越教育大学での人との出会いにおいて、尊敬できる人が多いと感じました。特に先輩方は研究に対して熱心に取り組んでおられる傍ら、それぞれの役割もこなしていて、それに加え私たちに懇切丁寧な指導やアドバイスをして頂き、私にとって憧れの存在となっています。コース内においてみんなが過ごしやすいように働きかけて頂き、素晴らしい環境で学ばせて頂いています。この素晴らしい環境の恩恵に与るだけでなく私からも積極的に働きかけ、少しでも集団の質を向上させることに貢献したいと考えています。そのために私が取り組もうと考えていることは、わからないことを自分1人で解決するのではなく、周りの人に聞いたり周りの人と協力したりす

ることです。勉強については、自分で調べることも先生に質問することも有効ですが、周りの意見を聞くことは自分の学びを深めることに大きく寄与します。尊敬できる先輩や友達、現職の先生といった多様な意見を聞ける機会はなかなかないので、この機会を最大限に生かしたいと思います。このことが学びの環境を良くすることに役立てばとも考えています。また、役割についてもわからないことは積極的に聞かなければならないと考えています。自分が任された責任ある仕事なので、自分がそれについてきちんと理解した上で実行することが結果的には先輩方の負担を減らすことにもなるのではないかと思います。そのためにも周りの人と自らコミュニケーションを取り、良好な関係、良好な環境を作る努力をしていくつもりです。

最後に、大学院における目標を2つ掲げたいと思います。1つは「与えられた役割に対して責任ある行動をとること」、もう1つは「周りの人と積極的に関わっていくこと」です。私は成人していながらまだ学生という身分に甘んじている部分があるので、これらの目標を達成する中で人間的に成長したいと考えています。研究を積み重ね自分の専門性を培うことを前提として、その学びの質を上げるための手段として、またそれを支える人間性を養うべくこれらの目標を掲げました。私にとっても、英語コースにとっても良い影響がある大学院生活にしたいです。



University of Queensland (オーストラリア・ブリスベン・セントルシア)のキャンパスの池に群れるCorella と呼ばれるオウムの一群。
(2016.3.11. JAELEN 編集委員会
ブリスベン特派員撮影)

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成4年度修了生）

連載第3回

ギターを弾き始めた中学生の頃、「探しものは何ですか? 見つけにくいものですか?カバンの中も机の中も、探したけれど見つからないのに、まだまだ探す気ですか?」という歌詞の歌が流行っていた。1973年に発売された『夢の中へ』という、井上陽水最初のヒット曲だそうだ。メロディーをつけずに読むと、音楽にはなりそうもない詞である。2番では「探すのをやめたとき、見つかることもよくある話で...」と唄っていて、「そうそう、そういうこと、あるあるっ!」だけれど、なんだか、すっきりスカッとしない歌ではある。

探しものは何ですか?

どこかで読んだ記憶があって、その一部をぼんやり覚えているエピソードを、ふと思い出すことがある。正確には思い出せないけれど、確かそんな話だった、そうそう、あれあれっ!けれど、それって具体的にはどんな話だったっけ?気になってしまうと、いつまでも後を引く。ギプスの上からかゆい腕を搔いているような、むずむずした気分で、なんとか、すっきりスカッと確かめたくなる。

「クリスマス・プレゼントにもらった、らくだ色のコートに“Made in Japan”と書いてあって、女の人が泣いちゃう」というエピソードをどこかで読んだことがあって、それをネタにして文章を書こうと思った。文章にするとすると、正確かつ具体的な文脈が必要で、原典に当たらなくてはならない。さて、どこで読んだのか、どこに書いてあったのか...。「プレゼント」「らくだ色のコート」「Made in Japan」「(なぜか)女の人が泣く」をたよりに、思い当たる本を捜すことになる。曖昧な記憶の中では、「その本の半分ぐらい読んだところの、右側ページの真ん中」あたりにあったような気がする。

まず思いついたのは、大学の時、アメリカ史の授業でレポートの課題になった『オンリーイエステディ』だった。「1920年代のアメリカでは、Made in Japan は、まだ粗悪品の代名詞で、安物のプレゼントだったのが恥ずかしくて」という文脈だったような気がする。その本は押し入れの中にまとめて置いてある大学時代の教科書の棚にあったはずだ。がらくた荷物の向こうにあっ

たその棚には、記憶の中にある黒っぽい表紙の本がなかった。他の本棚を探したけれど見つからなかった。いらいら、いじいじする。そうだ、手元になかったら、買えばいいじゃないかと思いつき、ネットで古本をポチる。届いた本の表紙は記憶の中のものとは違って「謹呈 藤久ミネ」という自筆の署名が入ったしおりがはさんであった(他の古本を購入した時もそんなことがあって、有名な音楽評論家の貴重な初版本で、これまた有名音楽評論家に贈呈されたしおりが挟まれている本が手に入り、サイン入り、かつもうひとりのお名前もあり、お宝探偵団に出せば相当に高額になりそうだったけれど、献本してもらった本を処分するときは気をつけなきゃね、とも思った)。最後まで読んだら、訳者あとがきのさらに後に、「本書は1975年に刊行された『オンリーイエスタデイ - 1920年代・アメリカ -』(藤久ミネ訳、研究社)を改訳したものです。」(p. 377)と書いてあった。この話は改訳した時に、削除されたのかも知れない。念のために、原書のペーパー・バックをポチる。表紙は記憶と同じ白黒の写真だった。An informal history of the 1920sとサブタイトルにあるから、時代的にはこのあたりじゃないかと期待していたのだけれど、やっぱり、ない…。

もしかしたら、ボブ・グリーンだったか。1950年代をノスタルジックに描いたコラムニストなら、書きそうな話ではないか。高校の教員になった頃、訳本がいっぱい出た。この頃に読んだ本は、子ども達にも読んでもらいたくて、子ども部屋の前の本棚に置いてある。誰も手に取った形跡がなく、綿ぼこりがたまった本棚の奥にあった何冊かを開いてみる。『アメリカン・ビート』『チーズバーガーズ』『アメリカン・タイム』『街角の詩』『アメリカン・スナップショット』…。懐かしい文章を読み返し、遠い若い頃を思い出していた。しかし、やっぱり、ない。ますます、曇りガラスを拭いても、明日が見えない状態が続くだけだった。わかったのは、ボブ・グリーンが、かなり昔の「不適切な関係」がもとで、長く務めたシカゴ・トリビューンを退職したというニュースだけだった。

もういい、わからないままでいいや、でもダメモトでネット検索をかけてみるかと思い、何回か試して、「プレゼント、コート、メイドインジャパン、粗悪品」とキーワードを入れたら、なんと検索結果のトップに、いきなりストレートな情報が入ってきた(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13100020158)。マーク・ピーターセン『日本人の英語』だった。しかも、本の真ん中ではなく、いちばん最初の「はじめに」が、「1 メイド・イン・ジャパン」で始まっていて、「日本にいながら頭脳の中の環境を英語に変えること」を薦めているのだった (pp. 1-9)。「クリスマス」ではなく「誕生日」プレゼント、「らくだ色」ではなく「黄褐色のキャメル・コート」で、女の人一人ではなく、お母さんと双子のおばさん、「made in Japan」だって」と大きな声で言ったのはいどこ、というデテイルが分かって、すっきりスカッとした。探すのをやめた時、見つかることも、よくある話で…。

ふたつめの探しものの話。上教大在学中に、Culture and Anarchy という難解な本を1時間に3行ほど読み進めていく授業を取っていた。ある日の授業の前に、ご担当いただいていた先生に、「福原麟太郎の『チャールズ・ラム傳』、バトル夫人のカルタ観という文章の中に『味方には根こそぎの味方、敵なら断然たる敵を好んだ』(p. 86)という表現があって、おもしろい訳だなあと考えて、原文を探しているのですが、なかなか見つからないんです」という話をした。その日読む予定になっていたページの半分も予習が終わってなくて、時間稼ぎの作戦だった…。しかし、本当に気になっていたのは事実で、上教大の図書館で原典を探したのだが、当時は所蔵していな

かった。その作戦はあんまりいい効果を生まず、その日は冷や汗をかきながら半ページほど読み進んだ。その週の終わりに、自宅宛てに封筒が届き、「前略 先日のラムの話に関するコピーをお送りします。お元気に。Saito 10/15」と黄色い付箋がついたコピーが中に入っていた。The World's Classics 版の該当箇所のコピーを送って下さったのだった。“MRS. BATTLE'S OPINIONS ON WHIST”の該当箇所で、「根こそぎの味方」は“a thorough-paced partner”、「斷然たる敵」は“a striking enemy”だと知った。すっきりスカッとした。いまでも、その付箋とコピーを『チャールズ・ラム傳』の本に挟んで大切にしている。

みつつめは、オバマ大統領の広島でのスピーチを聞いて思い出した話だ。原爆投下の命令は、誰が下したんだろうと、大学時代の英文購読で Kurt Vonnegut Jr.の *Slaughterhouse-Five* を読んだ時に疑問に思ったのが最初だった。高校で担任をしていた時に修学旅行で広島に行くことになり、この疑問をまた思い出して、原爆投下の命令書はどんなものだったか、いくつか関連の本を購入して調べた。原爆資料館でその展示を探したけれどなかなか見つからず、館内のインフォメーションで聞いて、団体の入り口からでは通らない、一般の入り口を入った正面の壁に額入りの ORDER TO DROP THE ATOMIC BOMB (<http://www.dannen.com/decision/handy.html>で見ることができます)を見つけた。25 July 1945 の日付で Thos. T. Handy から Carl Spaatz に宛てられた命令書の最後には“4. The forgoing directive is issued to you by direction and with the approval of the Secretary of War and of the Chief of Staff, USA. It is desired that you personally deliver one copy of this directive to General MacArthur and one copy to Admiral Nimitz for their information.”と書いてあった。“personally”という単語に逆上してしまったことを思い出す。原爆投下の決断には、それほどたくさんの関係者が関わっていたわけではないようだ。責任者出てこい!と思ったのだった。「最初の自立した原子力反応の場所」はシカゴ大学冶金研究所で、シカゴの一日観光バスに乗ると、Henry Moore による *Nuclear Energy* というオブジェが置かれているこの研究所の跡地に止まり、バス・ドライバーが「ここから、原子爆弾の研究が始まりました」とアナウンスする。数年前の8月6日にも乗車したことがあるが、他のお客さんたちは、何の関心もないようだった。そのオブジェから少し離れたところに、モハメド・アリが住んでいた家があるらしく、そこにバスが差し掛かるとドライバーはバスを止め、乗降口のドアを開いて、“Come on Ali!”とファイティングポーズをとるサービスをしてくれるのだけれど、こっちのほうはいつも大喝采だった。“71 years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed.”と始まるオバマ大統領の広島でのスピーチには賛否両論あるようだ。しかし、主語の‘death’は「自らの動作」として‘fell’したのか?‘the world was changed’の「行為者」は誰なのか?文法の授業で学生に質問されたら、なんと答えたらいいだろう。最初にあげたマーク・ピーターセンの『日本人の英語』には、「近ごろは英語国の学者のあいだでも受け身の文を排撃する動きがはじまっている(p. 140)」、「英語の感覚でいうと、受身は場合によって著者が自分の書いたことに対しての責任を回避しようとしている印象を与えるケースがよくある(p. 141)」って書いてあるんだけどなあ....

さて、英語教育である。ここ数年来、文部科学省を中心に、さまざまな検討がなされ、いくつかの施策が実施を見据えて動き出している。遡ってみると、英語教育の現場はいろいろな「改革」のウォーター・フロントとして、五里霧中の中、丸腰で、手探りで、がむしゃらに日々の教育活動

にとり組むことを余儀なくされてきた。英語教育における歴史の流れが「改善」を目指す取り組みであること、そしてその成果はどうかを検証するためには、慎重な検討が必要であろう。今年3月の高等学校卒業生は、「脱ゆとり世代」の第1期生だった。「ゆとり世代」と「脱ゆとり世代」の英語教育の成果には、なんらかの差異が認められるのであろうか?「ゆとりですがなにか?」なのか、それとも、それほど変わらないのだろうか?そもそも、英語教育の方法論研究は、何を探しているのだろうか?「そんなこと、当たり前だよ!!」って言うてみても、面と向かって聞かれると、言葉に窮してしまう自分もいる。

『夢の中へ』の2番は、「休むことも許されず、笑うことは止められて、這いつくばって、這いつくばって、いったい何を探しているのか」で始まる。もし、「探すのをやめたとき、見つかることも、よくある話で...」が、英語教育の研究にも当てはまるとしたら、ちょっと虚しい気もする。しかし、「いったい何を探しているのか」と継続的に自問し、「ぼんやり」のままでなく、明確に、具体的に、「探しもの」を捉えておくことは、けっこう重要なのだと、最近考えている。

編集後記

本号巻頭の小山明希恵先生の記事を読んでいると楽しそうな子どもたちの笑顔が頭の中に浮かんできます。Kaiserschmarrn(カイザーシュマーレン)とは一体どんなスイーツなのかと思い、ネットで画像検索をしたところ、ジャムが添えられた美味しそうなパンケーキの写真が幾つも出てきました。勝手に写真を使うわけにもいかないので本号には写真は載せられませんが、写真を見ると食べたくなりました。ウェブ上で日本語のレシピも探せますので、興味を持たれた方はぜひ、作ってみてはいかがでしょうか。小山先生のクラスの子どもたちは、このパンケーキを作る過程で、「ドイツ語と英語の言語的な関係を見出し、意見を交換し、グループの友達とワイワイやりながらこのデザートを作ったのだろう。そして、満足してジャムをつけて食べたのかな。ジャムはいろいろあったのかな。これこそ、Active Learning だな。」等と思いを巡らしています。

小学校の英語教育が5、6年生で教科化されることになりましたが、子どもたちが英語学習を楽しくスタートできるようにするための現場の苦労は想像に難くありません。小生は日本人EFL学習者を対象とする英語力と学習者要因の研究もして

いますが、動機づけの強さと英語力との関係が非常に強いことを示唆する結果が必ずと言ってよいほど出てきます。単調になりがちな英語学習を継続させるためには様々な形で学習者に“Kaiserschmarrn”を提供する必要があるだろうと思いつつ、夏休み後の授業の組み立てを考えることにしました。

(編集委員 H.I.)

2016年8月6日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子(上越教育大学)

野地美幸(上越教育大学)

飯島博之(埼玉県立大学)
